

「現代ハワイ語」の考察

—機能語 ‘ana および方向詞の比較—

岩崎加奈絵

kanaeiwasaki@hotmail.co.jp

キーワード： ハワイ語 ハワイ語統語論 言語継承と言語変化 方向詞 ‘ana

要旨

本稿¹は、ハワイ語²を時期によって「自然継承期ハワイ語」と「現代ハワイ語」の二つに分けて考える見方を提示し、両者の性質の相違を考察する研究の一環である。具体的には、機能語‘ana および方向詞について、二つのハワイ語間でのふるまいの比較や、現代ハワイ語特有の性質があるかどうかに着目し用例分析を行った。なお考察に際しては、ハワイ語の言語状況に鑑み、英語との対応や、レファレンスグラマーが現代ハワイ語に与える影響を念頭に置いた。二つのハワイ語間での比較では、‘ana は両者の間で出現頻度の違いはあまり見られなかったが、方向詞は現代ハワイ語の方で、わずかながら出現頻度が低くなった。また、現代ハワイ語の‘ana と各方向詞について、先行研究における記述と比較しつつ、注目すべきいくつかの特徴を提示した。さらに、現代ハワイ語に自然変化が起こる可能性についても言及する。

1. はじめに

ハワイ語はオーストロネシア語族の東部ポリネシア語派に含まれる言語で、ポリネシアの北端にあたるハワイ諸島で主に使用される言語である。歴史上、消滅の危機に瀕した経緯があり、現在の言語状況は消滅の危機にあるとは言い難いが、同時に使用域は非常に限定的、という状況にある。

本稿では、2 節でハワイ語の歴史的背景を見たうえで二つのハワイ語を定義する。それぞれの特徴や差異について、3 節ではポリネシア祖語の名詞化接辞に由来する機能語‘ana、4 節では方向詞を取り上げて考える。5 節では新世代の話者の登場と自然変化の可能性に言及する。

¹ 本稿の一部は、筆者の博士学位論文に含まれる予定のものである。また、東京大学大学院・言語学演習においても、「現代ハワイ語」に関する発表を行い、先生方や、コメンテーターの青山和輝氏、浅岡健志朗氏をはじめ、出席者の方々から多くの有益なコメントを頂いた。

² ハワイ語は孤立語とされ、「[述語]+[主語]+[目的語]+[その他の要素]」(VSO) という基本語順である。母音/ie a ou/ とその長母音/iē ā ō ū/ に加え、二重母音の /iu ei eu ae ao ai oi ou āi āu āe āo ēi ōu/、子音/h, k, l, m, p, w[v~w], n, [ʔ]/ を有している。近い言語にはマルケサス語、マオリ語、タヒチ語などがある。

2. 前提：2つのハワイ語

2.1 ハワイ語・ハワイ語記述の略史³

ハワイ諸島への人類の移住時期は諸説あるが、おおむね西暦 500 年前後といわれる。また、1000 年頃には諸島の周縁部にも人々が住むようになったという。

ハワイ語はこのハワイ諸島で 8 世紀以降にはすでに使用されていたと言われるが、文字文化を持たない言語であり、記録は西洋との接触を待たねばならない。1778 年にクック船長率いる船団が訪れた際、船員が記録した語彙リストがそのはじめと考えられている。

表記法の策定・ハワイ語の記述に貢献したのは、当時太平洋地域に進出していたキリスト教の宣教師たちである。1820 年代以降、先行していた近隣の記述（タヒチ語の表記やマオリ語の文法記述・辞書など）を参考に、ハワイ語のアルファベット表記がある程度規則化⁴されるようになり、1822 年には、ハワイ語表記に使用する文字の一覧が出版された。ある程度本格的な辞書(Andrews 1836 など)も 1830 年代以降編纂され始めたが、文法記述については、短いスケッチ以上のものは 1837 年に簡潔なものがようやく出版された。

ハワイ語およびポリネシア地域の言語の記述と研究は、この時期が後の時代に比べ盛んであり、改訂もこまめに行われた⁵。ただしハワイ語では資料が翻訳聖書に偏ったり、ラテン語や英語の文法記述の影響が色濃かったりと、現在の言語学的研究からみれば、貴重な示唆を含む一方で不十分な点も少なくない。また 1864 年を最後にこうした研究も途絶え、1950 年代初頭にハワイ語音韻論研究の一環として再び部分的なスケッチが現れるまで、現代言語学の知見に則る記述は現れなかった。

一方、18~20 世紀半ばまでのハワイ諸島の社会的背景であるが、1795 年にハワイ諸島を統一したカメハメハ一世以降のハワイ王朝（1810~1893）時代からすでに、白人系の人々の政治・経済的影響力は強く、特に英語話者の存在が大きかった。彼らの力の増大は後の王朝転覆・アメリカ併合に繋がった。フラなどハワイ特有の文化やハワイ語もその中で軽視され、1870 年以降は公文書作成が英語となり、アメリカ併合の 1898 年には学校教育（厳しい場合には家庭においても）における使用が禁止されるに至った。

また、初期にハワイを訪れたのは宣教師以外に商船・捕鯨船の寄港などがあったが、いずれも欧米の出身者であった。しかし、1830 年代以降は、プランテーションが設立されたことから、中国・日本・ポルトガル・その他の太平洋諸島などから大量の移民が流入した。ここではハワイ語や英語を主な語彙供給言語とするピジンが発生したが、後にまで残存したのは英語を基とするものである。移民の言語はもちろんハワイ語にも影響したと考えられるが、これまでその種の研究はほとんどなされていない。

ハワイ語が危機的状況を迎えた主な理由には、さまざまなことが考えられる。ハワイ民族の

³ ハワイの略史は後藤・松原・塩谷編(2004)参照。また、ハワイ語の記述・研究史は Schütz(1994)が詳細に述べている。

⁴ 声門閉鎖音を認めていないことや、含まれる子音の数・性質など、現代からみて問題を含んでいるものがある。また、声門閉鎖音の表記に関しては、この後も長く問題として残存し続けた。

⁵ Chamisso (1837), Andrews (1838, 1854), Alexander (1864)など。

象徴である王朝の転覆以外にも、松原(2004)によれば、ひとつには生活環境変化や伝染病の侵入によるハワイ人人口の激減が挙げられる。もうひとつは王朝の言語政策の失敗であり、指導層の英語傾倒や経済面でのハワイ語の弱さが国家語としてのハワイ語の定着を失敗させたという。こうしたことから、1900年時点で3万7000人程度だった母語話者が、1970年頃には2000人まで減少したといわれている。

しかし消滅の危機に瀕していた言語状況は、1970年代を境に大きく変わる。この時期、ハワイ固有の文化を見直そうという機運、いわゆる「ハワイ文化再興運動（ハワイアン・ルネサンス）」がおこり、言語もまたその中心におかれ、1978年には州憲法によりハワイ語は州公用語にまでなった。その後もハワイ大学を中核として教育が広まり、大学等における高等教育機関での授業に加え、近年ではイマージョンプログラムを受けるチャンスが各島に数多く設けられ、ハワイ語話者である、と自認する人口が増えている。また、フラのように伝統文化の教育・伝承の場は、成員は必ずしもハワイ語が堪能だというわけではないものの、やはりハワイ語を重要視する領域としてハワイ語の活性維持の一端を担っている。

同時期の言語研究として、ハワイ語-英語辞書（Pukui and Elbert 1957。60年代の数回の改訂のほか、71・86年に大規模改訂・増補されている）が復興に先立って発表されていたが、何より長らく古いものしかなかった文法書のリストに、1979年になり Elbert and Pukui(1979)が加わったことが大きな成果であった。この後は、言語復興に対する研究に比べれば分量的には少なくはあるが、個別事項を取り上げる文法研究が続けられている。

2.2 「自然継承期ハワイ語」と「現代ハワイ語」

前節を踏まえると、途切れた時期は上述の「学校における教育禁止（1898年）」から「ハワイアン・ルネサンス(1970年代)」以前までであり、そこにハワイ語研究・記述の断絶を並べて示すと、おおむね以下ようになる。

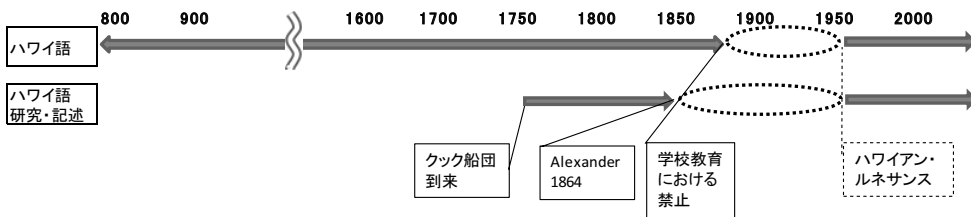


図 ハワイ語およびハワイ語記述史とハワイ語の「断絶」期

図の点線で囲われた期間では、「ハワイ語の自然継承の断絶」とともに、「自然変化の断絶」も起こっていると考える。ここで言う自然継承とは、家庭やコミュニティで親世代から子世代へ言語が滞りなく継承されていたことを指す。そうした状況がなくなり、学校やコミュニティでの主たる使用言語がハワイ語から英語に変化することにより、日常生活で主に使用される言

語ではなくなることを「断絶」と呼ぶとする。断絶が起こるときには、生活上のコミュニケーションでの使用の機会が激減するため、自然な言語変化も起こりにくいと考えられる。

実際、ハワイ語が公的に禁じられ、教育されなかった期間はそれほど長くはなかったため、第二次大戦後は高齢の話者を中心に、母語話者が少数ながらハワイ諸島に残っていた。そういう意味では「完全な自然継承の途絶」ではない側面もあるが、彼らの多くにとっても生活の中心が英語になっており、また、英語での社会生活が常態化した時点で、大多数のハワイ人はハワイ語を学ぶメリットを見出せなかったと考えられる。

こうした断絶期を挟んで、本稿では「二つのハワイ語」の存在を想定する。

- ① 自然継承期ハワイ語：自然継承が行われていた時期の（かつ記録が残っている）

ハワイ語

- ② 現代ハワイ語：自然継承の断絶後、1970年代以降の復興を経て現在使用される

ハワイ語

元来ハワイ語は文字を持たない言語であり、「自然継承期ハワイ語」は長きにわたったと考えられるものの、口承文化であったことから、残存する文字資料は19世紀以降に限られる。

一方「現代ハワイ語」の話者は民族文化としての言語保存に意欲的であり、過去の資料の再編にとどまらず、現代の「話者」が新たに書き起こす種々の文章や、ハワイ語で書かれた学術研究も存在する。ただ、こうした新しいハワイ語資料を生み出す人々は、Elbert and Pukui (1979)を規範としてハワイ語を習得した可能性が非常に高く、その点で現代ハワイ語には規範文法の影響が多少なりともあるのではないかと考えられる。

より具体的には、現代ハワイ語の性質について、分析や考察に先立ち、次のように仮説を立てた。現代ハワイ語は、1970年代以降の高等学校教育による伝承が始まりであり、その後のイマージョンプログラムにおいても、子供たちがそうした学習者を教師としてハワイ語を習うという事情から、話者は習得に関して、母語話者の知識や直感ではなく、「教科書」に頼ることになる。そして、現代ハワイ語に該当する時期に使用されている教科書は、基本的にハワイ言語学研究的知見、特に Elbert and Pukui(1979)に則っている⁶。

従って、レファレンスグラマーの「規範」意識が働くが、ハワイ語文法記述にはまだ不足も多く、頻出の機能語に限っても、その出現条件や機能の記述・定義が明確でないものも少なくない。その結果、自然継承期のハワイ語が示していた特徴や自然な言語変化の流れは途絶え、現代ハワイ語は自然継承期ハワイ語とは別の性質をすでに示し始めているのではないかと推測する。

⁶ 発行年は1979年だが、Elbertによるハワイ語研究はそれ以前から行われており、Elbert and Pukui (1979:vii)も、その出発点はHawaiian-English Dictionary (Pukui and Elbert 1957)にあるという。また現在使用されている代表的教科書のひとつ、Hopkins(1992:ix)のPrefaceでは、次のように記されている。“This book is the culmination of thirty years of studying Hawaiian that started in Samuel Elbert’s class at the University of Hawai’i at Mānoa in 1958.”

2.3 分析に使用した資料の性質

本稿では、用例に基づいた考察を行うため、以下のテキスト資料を用いた。

自然継承期ハワイ語：*Ka mo'olelo o Hi'iakaikapoliopele* (Ho'oulumāhiechie 2006)

Selection from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore

(Elbert 1959: 6-113)

現代ハワイ語：*Na hana kupanaha a 'Āleka ma ka 'Āina kamaha'o.*

(Carroll 2012, 『不思議の国のアリス』のハワイ語版)

選んだ理由は、①基本的に3人称視点で進行する物語文であるという共通した特徴を持つものである、②現代ハワイ語のテキストについては、英語原典があるものである、の2点である。

①については、文章形式による差異という可能性を排除するために形式を揃えた。

②については、もちろん現代ハワイ語テキストには、はじめからハワイ語で書かれたもの(他言語による原典を持たないもの)が数多く存在するが、例えば‘ana の場合、「英語原典の-ing 形を見る→話者が‘ana を想起する」という結びつきになっているかどうかを確かめやすいものとして採用した。

3. ‘ana

‘ana は先行研究で名詞化辞とされてきた要素であり、ポリネシア祖語の名詞化接辞⁷に由来するものとされる。実際、ハワイ語において、‘ana は動詞的な内容語に後続し、「決定詞—内容語(主に動作動詞)—‘ana」というまとまりを作るが、この句全体は名詞句として機能する。

だが、自然継承期ハワイ語の段階でも、名詞化辞と定義するだけでは適切な記述ではないといえる問題点があることから、岩崎(2012:34)では、自然継承期末期には「名詞化辞ではなく、動作性強調と見なすべき機能を果たしていた」とした。現時点でも基本的にこの立場をとり、‘ana は名詞化というプロセスにとって必須の要素ではないと考えている。

一方、現在ハワイ語教育において最もよく使用されているテキストのひとつ、Hopkins (1992) では‘ana を説明する際、“‘Ana is a nominalizing particle that turns verbs into nouns describing actions.” (Hopkins 1992:186) として用例(異なり語数 11 語)を挙げているが、そのほとんどが名詞の-ing 形⁸の対訳を与えられている。

⁷ Chung(1973)参照。

⁸ 英語の-ing 形といっても、名詞化に対応するものである動名詞以外に現在分詞や形容詞などもあるが、これと関連するかどうかは不明であるものの、初期のハワイ語文法記述でも、‘ana が進行相に対応する別の機能語 ana と混同されるケースもあった。また、区別していたとしても現代以前の表記法では声門閉鎖音を記さなかったため、見た目上の区別がつきにくいという事情もあった。

こうしたことを考慮し、今回は明らかに-ing 形ではないもの(king, something など)を除いたものを、それ以上分類せず“-ing 形”という語形に注目して一体として扱っている。そのため、表 2 や表 3 の-ing 形の列の数字には実際には動名詞以外のものも多く含まれている。具体的には、明らかに動名詞であろうものは約 270 例

(1) [Det – V – ‘ana]

- a) **hele** → **ka hele ‘ana**
 GO ‘go’ Det GO Ana ‘the going’
- b) **ho‘omaka** → **ka ho‘omaka ‘ana**
 BEGIN ‘begin’ Det BEGIN Ana ‘the beginning’
- c) English: When he went,

Hawaiian: At his going, **I kona hele ‘ana**
 Prep Poss.3sg GO Ana

(Hopkins 1992: 86 グロス は筆者による)

対訳が-ing 形ではない例も 3 例あり、そのうち 2 例は、「前置詞+‘ana 句」で when 節に対応する従属節を作るタイプの文である。これはハワイ語文では非常によく見られる表現だが、(1c) に示した Hopkins(1992)の説明では、一般的な英語訳である when he went とは別に、at his going とも記されている。これは、ハワイ語で when 節に対応する表現を作る際の考え方を、英語話者である学習者に説明するため、直訳的には英語の「前置詞+ing 形」に対応する「前置詞+‘ana 句」を使用する、としているものである。よって、when 節を対訳とする場合でも、英語の-ing 形が学習者の念頭にあるといえる。

このような対訳の在り方は、Elbert and Pukui(1979)や後続の研究でも概ね同じであり、いずれも英語の-ing に対応するとはっきり書かれているわけではないが、‘ana の訳に-ing 形をあてることは慣習化しているようである。

このことから、その大多数が英語を母語とする学習者たちの意識の中では、2 言語の二つの形式、‘ana と-ing 形が強く結びついて認識されていることを想定するのは自然と考える⁹。

よって、もしこれまでの仮定、すなわち「‘ana は自然継承期末期には名詞化辞の機能を失っていた」ことと、「現代ハワイ語の話者の意識としては、‘ana と-ing 形が結びついている」ことが正しければ、ハワイ語のなかでは一度名詞化辞でなくなったものが、周囲の言語や祖語の影響を受け、再び名詞化辞としての性質を取り戻す変化が起こった、ということになる。

3.1 二つのハワイ語の ‘ana

まず、2.3 に挙げた各資料における‘ana の出現数を提示する。

事前の予想としては、‘ana がポリネシア祖語の段階で持っていた名詞化の機能が薄れ、使用が必須でなくなっていたと考えられる自然継承期の末期に書かれたテキストよりも、名詞化辞という定義や、従属節を作る際に使用するという記述を意識的に学ぶ現代のほうが、出現がや

であり、その他進行相・修飾語としての分詞・分詞構文・判別しにくいものなどが約 400 例であった。

⁹ 厳密には、現象として「‘ana と-ing 形の結びつきが慣習化していること」と、「(少なくとも‘ana に関しては) 規範文法が現代ハワイ語に影響を与えていること」とは直接関係するものではない。ただし、結びつきの慣習化の動機のひとつとして規範文法が存在がある、と考えることも、ここまで述べてきた言語状況・記述の状況から不自然ではないため、今回は可能性の一つとしてこの 2 形式の結びつきに注目した。

や増えるのではないかと考えた。

表 1 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における ‘ana 出現回数の比較

	自然継承期		現代
資料名	Hi‘iaka [92215]	Selection from Fornander [19893]	‘Āleka [35916]
‘ana 出現回数	988	176	461
総語数に 対する割合	1.071%	0.884%	1.284%

※]内はコーパスの総語数

同じ 3 人称視点の物語文での頻度を見ると¹⁰、単純な割合だけでいえばやや現代の方が高くなっており、ある程度は予測と一致している。とはいえ、それほど大きい相違でもないため、規範意識が機能しているというに足るかは慎重でなければならない¹¹。

3.2 現代ハワイ語の ‘ana と-ing 形

次に、より現代ハワイ語に注目して、『アリス』のハワイ語テキスト中に現れた ‘ana 句が英語原典ではどのような用法であったかをチェックした。結果と用例を次に示す。

¹⁰ 違うタイプの文として祈禱文や医学書などからも ‘ana の出現数をカウントしたが、今回取り上げた物語文形式での頻度が高いのに対し、祈禱文では著しく出現数が減ることが分かっている。

¹¹ 現代ハワイ語の副資料として(1) ハワイ語文書データベース Ulukau (<http://ulukau.org>) で検出できる現代ハワイ語によるテキストデータのうち、総語数が 500 語を越えるもの、(2) 新約聖書 2012 年版の“Acts” (<http://baibala.org/cgi-bin/bible>))について ‘ana の出現数を採ったところ、次のようになった (いずれも 2017 年 9 月アクセス)。

補表 Uluaku 収録の現代ハワイ語テキスト・新約聖書“Acts” (2012 年版)・Lowe(1994)の ‘ana

資料名	総語数	‘ana 出現回数	総語数に対する割合
Wilson(1994)	1237	14	1.13%
Keolanui (2006)	1140	28	2.46%
Stender (2004)	829	6	0.72%
Kawa‘i‘ae‘a, Ka‘awa, Keolanui and Kruger (2009)	1556	14	0.90%
Wilson(1992)	782	7	0.90%
Avelino (2006)	1858	42	2.26%
Wilson (1993)	589	7	1.19%
Kruger (2007)	578	6	1.04%
The students and Teachers of Ke Kula ‘o Samuel M. Kamakau (2008)	532	3	0.56%
Mattoon (2004)	818	14	1.71%
Baibala Hemolele, Acts (2012 ver.)	34009	278	0.82%
Lowe(1994)	4602	70	1.52%

表2 ‘Ālekaに見られる ‘ana 句に対応する原典の用法

	-ing 形	従属節用法 (86)				その他	総数
		when	before	after	as		
用例数	140	30	12	3	6	235	461
総数に対して 占める割合	30.4%	18.7%				51.0%	100%

(2) -ing 形に対応する例

布： ...e no‘ono‘o ai i **ke kū ‘ana**, ... (Carroll 2012 :8)
 TA THINK Dem Prep Det STOP’ Ana

英： ...to think about stopping herself... (Carroll 2008: 8)

(3) 従属節用法に対応する例

布： ... a i **ka pau ‘ana** o kāna ha‘i‘ōlelo
 AND Prep Det FINISH(ED) Ana Poss.O Poss.A.3sg SPEECH

iki, ...

SMALL (Carroll 2012 :29)

英： ... and, when it had finished this short speech, ... (Carroll 2008: 28)

‘ana の総数に対し、約 30%が-ing 形で出現しており、また同じく‘ana の基本的な用法としてよくいわれる従属節構造も含めるとほぼ半数になる。それ以外のものについては行為名詞で出るもののほか、特に対応する構文とはいえない文によるもの・別の言い回し以外にも、そもそも対応する表現と思われる語や文が全く見つからなかったものも少なくなかった。

結果として「その他」に含まれる要素が多くなり、現時点では解釈の難しい数字ではあるが、たとえば、同じく英語との対応の慣習化が考えられる他の機能語の場合などと比較することができれば有用になりうる。

最後に、ハワイ語・英語双方の『アリス』における、章ごとの‘ana・-ing 形の出現回数を見た。0 章は序文を指している。

表3 『アリス』章ごとの‘ana (ハワイ語)・-ing (英語) 出現回数

章	‘ana			-ing		
	出現回数	総語数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数	総語数に 対する割合
0	3	337	0.89%	2	232	0.86%
1	49	2809	1.74%	54	2151	2.51%
2	25	2625	0.95%	55	2352	2.34%
3	23	2155	1.07%	42	1928	2.18%
4	36	3486	1.03%	71	2932	2.42%
5	31	2806	1.10%	51	2511	2.03%
6	39	3414	1.14%	78	2933	2.66%
7	39	3333	1.17%	60	2761	2.17%
8	35	3420	1.02%	81	2798	2.89%
9	56	3096	1.81%	46	2720	1.69%
10	32	2596	1.23%	41	2414	1.70%
11	42	2744	1.53%	36	2713	1.33%
12	51	3095	1.65%	61	2406	2.54%
計	461	35916	1.28%	678	30311	2.24%

ハワイ語にしても英語にしても、章ごとの偏りが大きい。-ing 形の用法の内訳をさらに細かく見ることによって分布の見え方が変わる可能性が大いにあるが、今回の取り扱いでは‘ana と-ing 形の章ごとの増減は必ずしも一致していない。むしろ9章のように、ハワイ語では平均よりずっと出現割合が高くなるのに対し、英語では平均より大きく低くなるなど、相反するふるまいも見られる。今回の結果からは‘ana と-ing 形の相関関係を見出すことは難しいが、両者の関係をより精緻に考察するため、判断が難しい例への対応を考えつつ英語の-ing 形の用法の内訳をさらに細かく判断し改めて割合を出すことや、同じような条件をもつ他のテキストとの比較などが次段階として必要である。

4. 方向詞

方向詞と‘ana とでは、英語との対応関係において差異がある。それは、ハワイ語の方向詞に対応する英語の形式や語、すなわち「‘ana に対する-ing」と同様の関係にある語形や機能語が確立できないことである。

方向詞には mai (<話者などの基準点>に向かって)、aku (<基準点から>離れて)、a’e (上に)、iho (下に) の4語と、maila, akula, a’ela, ihola のように、それぞれに代名詞的要素の la が

付加された形¹²とがある(何もつかない形を *o* 形、*la* が付加された形を *la* 形と呼ぶこととする)。これらは内容語の後に置かれ、先行する内容語の示す動作や状態の向かう方向を示す。例えば *hele* 「行く・移動する」に方向詞が後続すると、それぞれ、*hele mai* 「来る」、*hele aku* 「行く」、*hele a'e* 「(上方向に) 行く・のぼる」、*hele iho* 「(下方向に) 行く・くだる」というように、移動の向きを具体的にすることができる。ただしこの要素は、たとえ移動動詞のように方向が重要である語であっても、使用は必須ではない。実際、数多くの用例を見ると、動作を表す内容語に方向詞が付いていないのはまったく珍しいことでなく、任意性が見て取れる。使用すべき・使用すべきではない条件や制約は現在までの研究では明らかになっていないが、特に文脈により判断できる場合は使用されないことも多い。

先行研究における方向詞に関する主な記述を以下にまとめる。

表 4 先行研究における方向詞の記述

	Elbert and Pukui(1979:91-95)	Schütz, Kanada and Cook (2005:10, 16, 51-52, 86-87, 118)
directional	<p>最も典型的には以下の5タイプの動詞と共に使用される (自動詞、発言の有意思性他動詞、動きの有意思性他動詞、身体的な過程を指す自発的他動詞、Loa'a 状態動詞)</p> <p>非動詞文や名詞句中で「来る」「行く」の意味を持って使用される</p> <p>*代名詞、所有形、指示詞と共通する性質として、話者と聞き手の時間・空間的距離を示す</p>	<p>ある場所に向かつての、本来的な意味での、または比喩的な意味での「動き」を示すマーカーまたは構造</p> <p>*行われる場所を指す位置名詞と対照される</p> <p>以下の2種類があるとされる</p> <p>-方向修飾語 (modifier) ⇒<i>mai, a'e, aku, iho</i></p> <p>-方向前置詞 (preposition) ⇒<i>mai, i</i></p> <p>時間を表すのにも使われる</p>
aku	<p>「話者から遠い または 離れる」 (未来を指すことも)</p> <p>'away', future</p>	<p>話者から離れていく 'away'</p> <p>-比喩的な方向でもよい (比較など)</p> <p>-時間を表すこともある</p>

¹² 詳細はまだ明らかになっていないが、*o* 形と *la* 形には機能の違いがあるといわれることもある。例えば Schütz, Kanada and Cook (2005)は *akula, maila* にはアスペクトマーカーとしての機能があると述べている。

mai	<p>「話者の近く・話者へ向かって」 ‘to me’</p> <p>動詞マーカを伴わずに、動詞的なイディオムとして使用されることもある</p>	<p>「ここ（へ）：1人称へ向かって」 「談話の焦点に向かつて」 ‘here’ (toward first person), ‘in this direction’, ‘in the direction toward the focus of a narrative’</p> <p>-単独で、イディオム的に、命令文 「(私の方へ) 来い、持ってこい、くれ」として働く</p>
a’e	<p>目に見える（聞き手の近くを指す） 「(空間または時間的に) 上へ、近くの、隣接した、隣の」 ‘up, nearby, adjacent, adjoining, next’ in space or time</p> <p>-比較級に使われる</p>	<p>「上へ、前後に、横に、ななめに」 *直接的に「向かってくる・離れていく・下へ向かう」以外の動きに使う ‘upward, back and forth, sideways, diagonally any direction not directly toward, away, or downward’</p> <p>-複数個所でおこる動き -状態動詞の後：比較級を表す -イディオム的使用：「次」「別の」… -現在に隣接した時間を表す</p>
iho	<p>「話者の近く・話者へ向かって」 「下へ、自身」「近未来」 ‘downward, self’, reflexive, near future</p> <p>-身体的なプロセス -名詞として、または代名詞・位置名詞の後で再帰の意味 (self)</p>	<p>「下へ向かって」「自身」 ‘downward; self’</p> <p>-飲食・思考に関する動詞と共に使用する (Hopkins 1992:25) -時間表現と共に使用して以下を示す： i) 比較的最近のこと ii) (前の) 状態・動作の直後のこと</p>

方向詞の特徴は「ある地点に向けた」動きに着目していることであり、これはハワイ語の空間表現でよく使用される位置名詞 (mua「前」、hope「後ろ」、loko「中」、waho「外」、luna「上」、lalo「下」など) が「行為等の行われている地点」に注目していることと対照的である。

このうち、a’e と iho についてはそれぞれ up, down のように分かりやすく対応する英語の語が想定できる。一方、mai と aku は hither, thither が対応する語としてあてられていることが多いが、これらは英語の文章においてそれほど頻度の高い語ではなく、方向詞に対応させて hither や thither を使用する例は、管見の限り教科書で方向詞の説明を行うとき以外ではほとんどない。

また、*up*、*down* についても出現頻度が高い語であるとは言いきれず、少なくともハワイ語の文章において高頻度で現れる *a'e* や *iho* との対応が慣習化しているとは考えにくい。

実際、明確に-ing 形との対応が見られた‘*ana* の記述と異なり、教科書等においても、方向詞は結びつく語彙によって翻訳の際の対応の仕方が様々であり（前置詞を使用する・*come/go* のように語彙そのものが変わる *etc.*）、頻出語の訳し方や方向詞それ自体のもつ「意味（方向）」は示されても、ほぼ一対一対応にできた‘*ana* とは状況が明らかに異なっている。

以上のような事情から、分析に先立つ予想も、‘*ana* の場合とは異なる。方向詞は、‘*ana* と-ing 形のように形態上分かりやすい明確な対応関係が示されておらず、それが特に *mai* と *aku* で顕著である。つまり「(話者の多くにとって第一言語か、そうでなくとも馴染み深い言語である) 英語において形態上表出する対応要素がない」ことから、話者にとって使いどころがわかりにくい要素であると考えられる¹³。結果として、①意味上動作の方向性を明確にしなければ解釈に誤解が生じると想定される場合や、②英語とは関係なく、ハワイ語イディオムの場合では使用が義務的になるであろう一方、それ以外の場合には総じて方向詞が使用される頻度はむしろ低くなるのではないかと予測した。

4.1 二つのハワイ語の「方向詞」

以上を踏まえ、まず前節の ‘*ana* の場合と同じように、二つの時期のハワイ語における、3 人称視点物語文での出現数を比較した。

¹³ 方向詞の使用のうち、比較や時間用法などその後研究が進んだところもあるが、Elbert and Pukui (1979) においては次のような記述がされていることから、このように述べることができると考えられる。”In conclusion: It is difficult or impossible to fashion hard and fast rules for the use of *dicretionals*. The safest course is simply to follow examples slavishly.” (Elbert and Pukui 1979:95)

表5 自然継承期ハワイ語・現代ハワイ語の物語文における方向詞の出現回数の比較

資料名	自然継承期				現代	
	Hi'iaka [92215]		Selection from Fornander [19893]		'Āleka [35916]	
	出現回数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数に 対する割合	出現回数	総語数に 対する割合
mai	1295	1.40%	229	1.15%	362	1.01%
maila	621	0.67%	129	0.65%	172	0.48%
aku	1109	1.20%	175	0.88%	173	0.48%
akula	572	0.62%	211	1.06%	291	0.81%
a'e	430	0.47%	41	0.21%	54	0.15%
a'ela	347	0.38%	72	0.36%	68	0.19%
iho	225	0.24%	32	0.16%	77	0.21%
ihola	264	0.29%	126	0.63%	66	0.18%
合計	4863	5.27%	1015	5.10%	1340	3.73%

※]内はコーパスの総語数

今回の結果では、合計で見れば方向詞の総語数に対する割合は、自然継承期ハワイ語に比べ現代ハワイ語で下がっていると言えそうである。しかし個別の語を、*o*形と*la*形を区別せずに見ると、*aku*は自然継承期と現代で出現割合の違いが比較的大きい一方、*iho*のように、現代になり使用頻度は下がっているが、それほど大きい違いを示してはいないものもあり、ふるまいは一様ではないことがわかる。

次に *o*形対*la*形の比較でみると、そもそも同じ自然継承期でも *Hi'iaka* と *Selection from Fornander* とで傾向が異なる。特に *aku-akula* は二つの資料が真逆の傾向を示しており、*iho-ihola* でも二つの形の使用割合が、*Hi'iaka* でほぼ同じ割合で出ているのに対し、*Selection from Fornander* では *la*形が明らかに多い。このような状況から、今回採用した自然継承期ハワイ語の二つの資料を単純に現代ハワイ語の資料と比べることは難しく、両者に違いがあるとすれば、現時点では資料による差異だと考えるのが妥当である。

4.2 現代ハワイ語の方向詞

次に、方向詞が現代ハワイ語においてもつ性質に着目する。

表5を見ると、'Āleka では Schütz, Kanada and Cook (2005)がアスペクトマーカ¹⁴の機能を持

¹⁴ 『アリス』の英語原典は、基本的に地の文の過去形での語りを中心となっているが、ハワイ語で対応する表現を作るには完了のアスペクトマーカを使用することになる。完了のアスペクトマーカは動詞の前に置

つとじているものうち、akula は確かに比較的よく表れているようであるが、一方で maila が多く出たとはいいたい。

次に各方向詞の用法については、iho と a'e において、いくつか言及すべき特徴がみられた。

まず、iho の 77 例中 61 例が英語の再帰代名詞 (herself, itself など) に対応しており、非常に大きな偏りを示した。残りの例については、時間的近接性を表す用法が 8 例見られたほかは、性質的に共通するところは特になく、先行研究でほかに指摘されていた飲食・思考に関する動詞との共起は見られなかった。

他方、ihola では 66 例中 5 例しか再帰用法が見られず、思考に関する動詞との共起 (18 例) が突出して多いほかには、明確な移動や方向性を提示する例が 10 例ある以外、特に意味・用法の傾向は無かった。なおこちらにおいても、先行研究で挙げられていたものうち、時間的近接性を表す用法は 4 例あったが、飲食に関する動詞との共起は見られなかった。

次に a'e は、先行研究ではイディオムの使用・比較・時間的近接性を示す用法の多さが指摘されている。それを踏まえてまず a'e の 54 例を見ると、ハワイ語イディオムが 15 例・(時間的¹⁵⁾ 近接性が 21 例・比較が 7 例で、これらが大半を占めていた。それ以外の例では、位置名詞 luna (「上」) と共起するものはあったが、文脈を含めても「上」と関連付けて説明できる用法はほぼなかった。そのため、これらの a'e がなぜ敢えて使用されているかの動機付けは必ずしも明らかではない。

一方、a'ela の 68 例中ではハワイ語イディオムらしきものがなく、時間的近接性が 1 例、比較が 1 例と、ø 形の場合と全く振る舞いが異なった。その代わりに、立ち上がる・見上げるなど「上」を指向する用例が 17 例と多く、それ以外では Hopkins(1992)が iho と共起しやすいと述べていた、思考に関する動詞との共起が 14 例見られた。

やや特異な例として、sat down に対応して noho a'ela が当てられているものがあつた。単に「座つた」と示したいのであれば、a'ela ではなく iho(la)の使用が予想され、方向としては真逆である。ここで、先行研究とは異なるが、a'ela が完了のテンス・アスペクトマーカ―としての用法を持つ、と仮定する。すると、思考に関する動詞が、先行研究のいう「下」指向の iho ではなく「上」指向の a'ela の方とより多く共起した理由を、意味上の理由ではなくテンス・アスペクトを示すためである、と説明することも可能になる¹⁶。もっとも、これは先行研究の指摘が正しいという前提とした可能性のうちのひとつであり、現代ハワイ語の特徴として方向詞の記述に加えるには、更なる裏付けを必要とする。

以上見てきたように、方向詞の使用は、事前の予測とおおよそ一致して、減少の傾向を示しているように思われる。これを、英語に対応する要素がないことによる、と述べることもできるかもしれない。あるいは方向詞自体の研究や記述がまだ十分とはいいたい状況であるため、

かれる文頭の ua と文中の i とがあり、これらの方がより典型的な例である。

¹⁵ 細かく見ると、時間的近接性を表す用法 (「次の日・次の瞬間」など) 10 例と、必ずしも時間的とは言えないが近接・隣接を示す用法 (「次の詩・次の証人」など) 10 例が含まれた。

¹⁶ なお、本稿では詳しくは扱わないが、mai、aku については iho や a'e と比べると、最も典型的な用法である、動作の方向を示す例と、イディオムとが多い傾向にあると言えそうである。

イディオムなどを除けば、従うべき「規範」が少ないことと関係している、と考えることもできる。どちらも現時点では推測にすぎず、もちろんいずれも当てはまらないという可能性も含めて考える必要がある。现阶段ではデータが不足しているが、今後見る資料を増やし、こうした仮説を検証する価値はあると考える。

5. ハワイ語文法の自然変化の可能性

これまでのハワイ語研究では、1970年代以降の「現代ハワイ語」について細かく論じることはほぼなかった。ただ、この時期に含まれるハワイ語の新たな特徴が全く記述されていない訳ではなく、例えばShionoya(2004:242)は、ハワイ語母語話者へのインタビュー調査を行う過程で、イマージョンプログラムでハワイ語を習得する子供が、元来のハワイ語文法では生成されない文を発話したことを報告している。

(4) He aha kēia mea no?

what this thing for ‘What is this for?’

Cf. He aha kēia? ‘What is this?’ (Shionoya 2004:242)

※元来のハワイ語文法に則る場合、前置詞で終わる文は許容されない。

Shionoya(2004)はこの発話を英語の影響によるものではないかと述べており、英語の対応する文のことを考えると、確かにそのように思われる。その場合、発話者である子供は、英語の前置詞 **for** とハワイ語の前置詞 **no** を対応させており、英語文で必要になる前置詞に対応するハワイ語の前置詞を、ハワイ語文でも文末に置いたということになる。

現時点では個別の報告であり、使用の実情はともかくこうした報告の数は多いとは言えないが、イマージョンプログラムに参加して育つ子供たちが増えていくにつれ、主に英語やその他の言語の影響を受けて元来の用法から逸脱する表現が増え、ゆくゆくはハワイ語の文法に適った文として定着するようになる可能性はもちろんある。上の例で言えば、対応する英語文で前置詞が文末に来る表現に、ハワイ語文でも文末の前置詞を置くことを繰り返すうち、ハワイ語文法においても特定の場合には前置詞を文末に置くことを許容するようになるかもしれない。言語変化の予測はできないが、今後のハワイ語話者数増加は統語的变化の可能性につながるとは言えそうである。一方で、イマージョンプログラムでも、教育で使用される文法は 2.2 で述べたような、「教科書」的、オーセンティックなハワイ語文法であり、そうした文法の影響力が強い状況を見ると変化が抑制されるようにも思われる。

いずれにしても、新世代のハワイ語話者がハワイ語を使用する生活場面が増える¹⁷ことで、

¹⁷ イマージョンプログラムの卒業生が、学校教育を終えた後にどのような職業に就き、どのような生活を送るかという点は、ハワイ語イマージョンプログラムの大きな課題である。現状では、ハワイ語を主に使用して生活するには、ハワイ語・ハワイ文化の教師など限られた職種を選ぶことになり、その他大多数の職業に就く場合にはやはり英語コミュニティに入り、英語を使用する必要性に迫られる。家庭はその限りではないが、配偶者のハワイ語能力によってはやはり英語を使用する可能性があり、本人のハワイ語能力の高さが、次世代に自

「現代ハワイ語」と「自然継承期ハワイ語」との差異が一層拡大することが考えられるため、今後時間をかけてコミュニティにおける発話の観察ができることが理想的である。

略号

3 人称 A 所有・A 形 Ana 'ana Det 決定詞 Dem 代名詞 O 所有・O 形 Poss 所有
Prep 前置詞 sg 単数 TA テンス・アスペクトマーカー

参考文献

- Alexander, William De Witt (1864) *A short synopsis of the most essential points in Hawaiian grammar: For the use of the pupils of Oahu College*. Honolulu: Whitney.
- Andrews, Lorrin (1836) *A vocabulary of words in the Hawaiian language*. Lahainaluna: Press of the High School.
- Andrews, Lorrin (1838) Peculiarities of the Hawaiian language. *The Hawaiian Spectator* 1(4), pp.392-420.
- Andrews, Lorrin (1854) *Grammar of the Hawaiian language*. Honolulu: Mission Press.
- Chamisso, Adelbert von (1837) *Über die Hawaiische Sprache*. Leipzig: Weidmannschen.
- Chung, Sandra (1973) The syntax of nominalizations in polynesian. *Oceanic Linguistics* 12, pp.641-686.
- Elbert, Samuel H. and Mary Kawena Pukui (1979) *Hawaiian grammar*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 後藤明、松原好次、塩谷亨編著(2004)『ハワイ研究への招待』関西学院大学出版会。
- Hopkins, Alberta Pualani (1992) *Ka lei ha'aheo: Beginning Hawaiian*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 岩崎加奈絵 (2012) 「ハワイ語における機能語'ana」『東京大学言語学論集』32, pp.23-36.
- 松原好次 (2004) 「ハワイ語復権運動の現況」 In: 後藤明、松原好次、塩谷亨編著(2004), pp.91-104.
- Pukui, Mary Kawena and Samuel H. Elbert (1957) *Hawaiian-English dictionary*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Shionoya Toru (2004) The current situation of the Hawaiian language. In: 柴田紀男・塩谷亨 (編) 『環太平洋の言語』第3号, pp.237-245.
- Schütz, Albert J. (1994) *The voices of Eden: a history of Hawaiian language studies*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Schütz, Albert J., Gary N. Kahāho'omalū Kanada and Kenneth William Cook (2005) *Pocket Hawaiian grammar: A reference grammar in dictionary form*. Waipahu: Island Heritage Publishing.

然継承されるようになるには大きな社会的変化が起こらねばならず、その道は険しいものと考えられる。こうした状況下で自然な言語変化が起きうるか、起きるとしたらどのような変化なのかは言語学的観点からは興味深いといえる。

コーパスに使用したテキスト

Carroll, Lewis (2008) *Alice's Adventures in Wonderland* [Originally published in 1865]. Portlaoise: Evertime.

Carroll, Lewis (2012) *Na hana kupanaha a 'Āleka ma ka 'Āina kamaha 'o* [Translated by R. Keao NeSmith]. Portlaoise: Evertime.

Elbert, Samuel H. (1959) *Selections from Fornander's Hawaiian antiquities and folk-lore*, Honolulu: University of Hawaii Press.

Ho'oulumāhie (2006) *Ka mo'olelo o Hi'ikaikapoliopole*. Honolulu: Awaiaulu Press.

補助資料として使用したテキスト<全てUlukau: *The Hawaiian Electronic Library*収録>

*データベース URL (すべて 2017 年 9 月アクセス)

Ka Haka 'Ula O Ke'elikōlani College of Hawaiian Language and ALU LIKE, Inc.. *Ulukau: The Hawaiian Electronic Library*. <http://ulukau.org/>

Avelino, Kawehilani (2006) *Ma Uka, Ma Kai*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.

Kawa'i'ae'a, Kulamanu, Emilia Ka'awa, Kawehi Keolanui and Malia Kruger (2009) *'O Kaina ke Kumu Koa*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.

Keolanui, Joshua Kawehi (2006) *E Kū'u Hiapo*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.

Kruger, Malia (2007) *No Ka 'Ūlili Niu*. Hilo, Hawai'i: Hale Kuamo'o.

Lowe, Ruby Hasegawa (1994) *'O Lili'uokalani*. Honolulu: Kamehameha Schools Bernice Pauahi Bishop Estate.

Mattoon, Cathleen Pi'ilani (2004) *He Aha Ka Mea 'Ai No Ka 'Aina Awakea?* Hau'ula, Hawai'i: Nā Kamalei Ko'olauloa Early Education Program.

Stender, Joshua Kaiponohea (2004) *Nā Makana a Nā I'a*. Hoolulu: Hale pa'i o nā Kula 'o Kamehameha. The students and teachers of Ke Kula 'o Samuel M. Kamakau (2008)

He Ka 'a 'o no Hauwahine lāua 'o Meheanu. Honolulu: Kamehameha Publishing.

Wilson, William H. (1992) *Ko Pele Hiki 'Ana Mai I Hawai'i*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.

Wilson, William H. (1993) *No Haumui Lāua 'O Hauiki*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.

Wilson, William H. (1994) *'A'ohe Inoa Komo 'Ole O Ka 'Ai*. Hilo, Hawai'i: 'Aha Pūnana Leo.

“Modern” Hawaiian Language

IWASAKI, Kanae

kanaeiwasaki@hotmail.co.jp

Keywords: Hawaiian language, Hawaiian grammar, language inheritance and language change, directional, ‘ana,

Abstract

In this paper, the distinction within Hawaiian language is introduced: “naturally-inherited Hawaiian” and “modern Hawaiian”. They are separated by the temporal discontinuation of the natural inheritance within the communities or families on Hawaiian Islands. “Naturally-inherited Hawaiian” had been spoken until about 1900, while “modern Hawaiian” has been used since 1970s.

To clarify whether there are any syntactic differences between those two Hawaiians, or what modern Hawaiian would be like, the present paper focuses on two kinds of function word, ‘ana and directionals. The analysis, which is based on the examples from written texts, takes into account of the possible impacts of English and the reference grammar of Hawaiian upon modern Hawaiian.

The points are, (1) as for ‘ana, there are only little differences of the frequency of usage between two Hawaiians, but (2) directionals show a slight decrease in the frequency in modern Hawaiian.

In addition, the possibility of the natural language change in modern Hawaiian is also briefly mentioned.

(いわさき・かなえ 東京大学大学院)